

春簾雨窓

頼鴨屋

春は自然往来して人は送迎す
愛憎何事ぞ陰晴を惜む

花を落す雨は花を催す
一様の檐声前後の情

【作者】頼鴨屋(一八二五〜一八五九年)(文政八年〜安政六年)頼山陽の第三子として京都三本木町に生まれる。幕末の詩人。名は醇(じゆん)、

字は子春(ししゆん)、通称は三樹または三樹三郎と称し鴨屋、古狂生と号した。十八歳の時江戸に游学し昌平黌(しやうへいこう)にて学ぶ傍ら佐藤一斎・梁川星巖等と交流し精研する。勤王の志厚く京都に帰り星巖・梅田雲浜らと尊皇攘夷の大策を画(かく)するも安政の大獄に捕われ吉田松陰、橋本左内等と共に安政六年十月小塚原で刑死す。その刑に臨(のぞ)むや従容として一首賦す(獄中作)。
年三十五歳。

【語釈】*別陰晴：陰は曇 曇と晴と区別する *檐 聲：のきはにしたたる雨の音 *前後情：花の咲く前と咲いた後の気持

【通釈】春は自然にやってきて、いつともなく去ってゆく。我々はそれをそのまま自然に送り迎えすればよいのである。それなのに人は晴れたといつては喜び雨だといつては憎むのは何としたことだろう。同じ雨でありながら花を散らす雨は、花を促(うま)か(し)開かせた雨である。同じ軒(のき)の雨だれの音も聞く時によって 好ましい雨、憎らしい雨と、このよな情を催させるのである。

【備考】窓の簾(すだれ)に春雨の降るのを眺めて作った詩である